



# Via Latina 22

2022年3月 308号

## 総本部よりのお知らせ－マリア会

### フランス管区への総長評議員会の視察訪問

2022年1月18日から19日にかけて、教会法にのっとり総長評議員会がフランス管区の視察訪問を行いました。この訪問は当初、2020年4月、5月に予定されていましたが感染症拡大によって2回予定を変更せざるを得ませんでした。総長評議員会は、フランスの会員たちが各共同体で私たちを歓迎してくださったこと、また私たちの訪問を最近の状況に応じて喜んで変更させてくださったことに感謝いたします。

評議員会の今回の訪問はフランスに住んでいる兄弟たち（ベルギーにいる1名を含む）に限定されたとはいえ、フランス管区はコンゴ特別地区とコートジボワール従属地区を含んでいます。このグループは52名の修道者から構成されており、これにはイタリアで他の宣教活動に従事している5名が含まれています。



総長A.J.Fétis師，教育局長M.Magnan士，財務局長M.McAward士  
ボルドーのセント・マリー・グラン・ルブラン校にて  
小学校校長のJ.F.Berthonneau氏とともに

フランス管区の宣教活動は、パリ、ボルドー、そして国の東部に配置された7つの教育施設と2つの大学生の学生寮（パリとアントニー）、および他の事業と施設を含んでいます。これらの施設の中で

も、マリアニスト家族の創設場所である、ボルドーのマドレーヌ聖堂は特別な存在です。教育事業（その幾つかは長い伝統がある）は、全般的に大きな名声を得ており、大変評価されています。すべての教育施設は1つのネットワークに纏められており（tutelle）、これにはフランスのマリアニスト・シスター（FMI）の2つの学校も含まれています。

フランス管区は、2022年8月15日のフランス地区への移行に向けた計画をもって、再構築の過程を終了しつつあります。総長評議員会の会議もまたこの再構築の過程で管区長評議員会のメンバーに同伴する良い機会でしたが、この過程は常に複雑であり、多くの努力と作業が必要となります。



**5名の総長を含め、300人以上のマリア会員が  
埋葬されているサン・ティボリット墓地**

1月23日に、総長評議員会は、シュシー・アン・ブリのマリアニスト・シスターの学校で、マリアニスト家族の全ての枝の代表者と共に、私たちの創立者の祝日をお祝いする機会を持ちました。これに加え、この訪問視察の間に、なんとMLCs、FMI、そしてアリアンス・マリアルのメンバーとの会議を行う機会がありました。

総長評議員会は全ての共同体で快く迎えて頂いたことに、そして特に管区長評議員会に対して、その働きと寛大さに感謝します。私たちは兄弟たちの生活と宣教活動に於いて彼らを導き続けてくださるようおとめマリアに祈ります。

---

## 四旬節：天と地における希望の時節

明日は灰の水曜日です。明日、私たちは今年の四旬節をスタートします。明日、もう一度、私たちは、私たちが罪びとであること、贖いが必要なこと、そして私たちは慈悲深い神を頂いており、その大きな愛が私たちの弱さを克服していることを非常に強く認めます。恐らく、私たちの大部分は自分が罪びとであると思出す必要はないでしょう。詩編50（51）が毎金曜日の朝、私たちに思い出させる通りです；私の罪、私はそれを知っています、私の罪は常に私の前にあります。そうです、私たちは罪びとです、しかし四旬節は罪を認めることで終りではありません。

私たちの多くは四旬節の間、多分償いのため、多分この季節のねらいをしばしば心に留めるものとして、

特別な実践を行うでしょう。四旬節中によく知られている朗読の一つであるイザヤ書58章は、私たちの真の回心は自分自身に集中することにあるのではなく、むしろ個人としてまた社会として、他者、私たちの世界、そして神に対する私たちの関係を修復することに存することを私たちに思い起こさせます。逆説的ではあるが、私たちが内的に癒されるのは、外部へと向かうことにおいてなのです。

「私の選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を絶ち、軛の結び目をほどいて虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと。そうすれば、あなたの光は曙のように射出し、あなたの傷は速やかいやされる。あなたの正義があなたを先導し、主の栄光があなたのしんがりを守る。あなたが呼べば主は答え、あなたが叫べば〈私はここにいる〉と言われる。」



神の深い慈愛は私たち自身の慈愛の行為を通して見出されるのです。別言すれば；私たちのお互いとの関係を癒やすことなしには、神との私たちの関係を癒やすことは出来ないのです。関係を癒やすことは、単純に“物事を正しくすること”と定義されうるでしょう。このことは、私たち1人ひとりに、私たちの隣人に、私たちの国に、そして私たちの教会にあてはまります。

教皇フランシスはこれらの真理を常に主張してこられました。教皇回勅、「ラウダート・シ」と「兄弟の皆さん」は、神の愛を信じる者として、またそれゆえに、同時に私たちの共通の家に関わりある者として、お互いへの私たちの関わりについての特別に豊かな黙想内容となっています。この2つの回勅を用いて、マリアニスト国際 website ([www.marianist.org](http://www.marianist.org)) はこの四旬節のための特別な焦点として、関係を癒やすというこのテーマについての週毎の黙想内容を載せた特別な小項目を準備しました。皆さんの2022年四旬節に同伴する資料として、皆さんがこのページを読み、それを活用するようお勧めします。これが、神の慈愛における希望、そして神の全ての民と私たちの共通の家へのお互いのケアと尊重によって受け取るお恵みにおける希望、の旅でありますように。

このwebsiteでのコメントの発信、あるいはEメールでの皆さま自身の見解の分かち合いを自由に行ってください：[lent2022@smcuria.it](mailto:lent2022@smcuria.it)

---

## 海軍少将、山本信次郎

マリアニストと深い係りがある日本人キリスト信者の中で、海軍少将、山本信次郎は際立った存在です。（パールハーバー攻撃の責任者であった海軍大将、山本五十六と混同しないでください）

1891年に、日本の上長が、修道者が夏の間リラックスできる海に近い場所を探していたとき、山本家と接触する機会があり、一軒の家を借りることになりました。修道者たちと山本家の人々の間で友情と信頼が築かれました。若い信次郎はしばしば修道者たちと色々な活動や娯楽を共にしました。

山本信次郎は1877年12月22日、片瀬のこの町で生まれました。彼が暁星学園の寄宿舎に入ったのは14歳のときでした。聡明で勉強家でそして快活な少年であった彼は、成績優秀で種々の受賞を重ねる一方で、同時にしっかりとした個性を築き上げました。両親の許しを得て、彼はキリスト教を学びカトリック信者になる事を求めました。彼はローマでの会議の間にこの事を次のような言葉で表現しました：《私は東京のマリアニスト学校でカトリック信者に改宗した最初の生徒です。また私は1893年のクリスマスの祝日に暁星学園の聖堂で洗礼を受けた最初の生徒でもありました（洗礼名はステファノ）。私は、若者として自分の心の中に起こったことを、深い感動なしに思い起こすことは出来ません・・・》



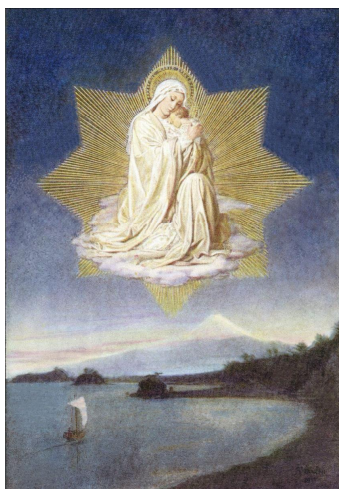
彼の改宗はほんの始まりに過ぎませんでした。最終的には、彼の家族全員がカトリックに改宗しました。彼の父親自身は86才で洗礼を受けました。

海軍兵学校を卒業後、彼は日清戦争と1904－1905の日露戦争に参戦し、この日露戦争において、彼は英雄的な行動ゆえに金鷄勲章（Ordre du Milan d'or）を授かりました。彼は後日この出来事について次のように書いています：“私がしたことは殆ど何の価値もありません、或いは少なくとも称賛に値しません。むしろ私たちがそれについて語るのを恥ずかしく思います。もし今日まで私が多くの危険から逃れることが出来たとすれば、それはひとえに皆さんが、愛し、敬うよう私に教えてくださった聖母マリアの特別な守護によるものです。3か月半以上私は日本にいませんでした。私は種々の秘跡で強められる必要があります[...]。旅順口が陥落したことに伴い、私は少し休みの時間を見つきたいと思います”。手に入れた平穏な状況を利用して、同じくカトリック信者であった吉原千代と結婚し、4人の子供たちに恵まれました。



山本夫妻 4人の子供とともに

1916年、日本はイタリアで外交使節団を開始し、山本少将はこの使節団の海軍武官になりました。実際のところ、彼は一海軍武官以上の人物でした。彼の完璧なフランス語と英語の知識と共に、彼がカトリック信者であることは、この外交使節団にとって貴重な利点でした。



山本少将の方では、この機会を利用して、ローマのマリアニスト、特に日本の改宗のため暁の星であるマリアへの祈りを作ったモーリス神父と連絡を取りました。彼はこの祈りに1枚の絵を添えてはどうだろうかと考えました。彼は画家のフランチ女史に一枚の絵を描くよう依頼しました。それから、彼はこの絵を教皇ベネディクト15世に見せて、それを祝福して頂きました。第一次世界大戦後、1919年のパリでの平和会議で、彼は日本使節団の秘書官に任命されました。

1919年のパリ会議の時に説明したように、彼の信仰は深く、日本が改宗するのを熱望していました：「日本の改宗は急を要し、それに向けて直ちにたゆまず取り組みことが重要です、なぜなら数々の障害が無視できないからです[...]。もし日本が迅速に真の宗教に改宗しなければ、それは日本にとってだけでなく、その影響下にあり、また10億の非キリスト者を有する極東全体にとっても悲惨なことになるからです」。そして彼は続けています：「皆さんの祈りで、私たちを助ける多くのフランス人宣教師が誕生しますように！ 日本の改宗のため、極東の人々の改宗のため、そして最終的には世界平和のために、どれほど彼らは役立つことでしょうか！ 何故なら、真の平和は教会においてだけ見出されるものであり、同盟、あるいは全く人間的、さらには異教的組織の中には見出されないからです。平和をもたらすために来られたキリストだけが、永続する地上の平和を私たちに与えることができます。キリストがその平和を世界にお与えくださいますように！」

ベルサイユ条約に従って、カナリヤ、マリアナ、そしてマーシャル諸島が日本領になりました。これらの諸島で働いている宣教師たちの運命はどうなるのでしょうか？ 日本はこの課題を解決するための寛容さを示しました。この状況は、教皇ベネディクト15世の手から大聖グレゴリウス勲章を授与されるという栄誉を山本少将にもたらしました。この勲章を授ける中で、教皇は強調しました、「山本少将は自分の任務遂行に於いて、賢明な熱意をもって、教皇庁と日本政府の見解と要望に等しく対応しました」。

ヨーロッパ滞在の後、山本少将は裕仁皇太子宮廷付に任命され、1921年の皇太子ヨーロッパ訪問に通訳として同行しました。

山本少将は、心底はマリアニストでした；彼は、母のように敬い愛していたマリア会と結びついていました。この旅行中、彼は機会を見つけて、通過する国々でマリア会共同体を訪れました。



日本政府はこの訪問の成功に大いに満足し、この皇太子訪問について説明するため、山本少将に日本の主要都市への公式講演ツアーを行うよう要請しました。

1923年の悲惨な関東大震災に続く数年は、山本少将にとって家族の出来事や国内での軍国主義の台頭のために困難な時期でした。彼が引退をしようとしていた1937年に、日本政府は日本の良い面について講演するため、山本少将に呼びかけ、彼をアメリカとヨーロッパの16ヶ国に派遣する考えを持っていました。これは大変難しい仕事で、ほとんど不可能な任務でした。しかしながら、彼は愛国心からこの任務を引き受けました。出発前、1937年11月頃、彼は東京のマリアニスト共同体を訪れました。彼は心を打ち明け、会員たちの祈りを懇願しました。“どうか私のために皆さんの絶え間ない祈りを捧げてください。この任務は私にとって死のようなものです”。それは大変苦しい別れの言葉でした。

他の同じような使命をいくつか達成しようと努力した後、山本少将は脳梗塞に襲われ、日本に戻り、1942年2月28日死去しました。

東京大司教は大勢の人たちの前で彼の葬儀を司式しました。4月6日、山本少将を偲ぶ会が持たれ、最高裁判所長官の田中耕太郎が次のように述べました：《去年、日本のカトリック共同体は岩下壮一神父を亡くしました。その1年半後、この度、私たちはまた山本信次郎を亡くしました。皆さんは誰でもこのお二人が私たち日本のカトリック共同体の最高の代表者だったことをご存知です。彼らは、叡智、哲学、そして宗教に関わる全ての人々にとって、私たちの共同体の有する二人の偉大な助言者、宝物のように大切な二人でした。一方で、この両者は熱心な信仰を有しており、他方、彼らはこの信仰およびこのカトリック哲学を明確に生きた使徒たちでした。この意味で、二人の間には何の相違もありませんでした。》

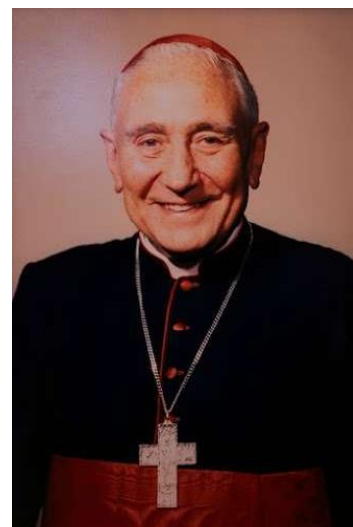
---

## Eduardo Pironio枢機卿の列福に向けての一步前進

2月18日金曜日、教皇フランシスは教皇庁列聖省長官、Marcello Semenaro枢機卿を伴った謁見の場で、ローマカトリック教会の枢機卿、神の僕であるEduardo Francisco Pironioの英雄的徳の認定を行いました。

ラ・プラタの補佐司教（1964–1972）として、それからマル・デル・プラタの司教（1972–1975）としてマリアニストを知っていたPironio枢機卿は、奉獻生活に関する教皇庁長官として、ヨハネ・パウロ2世にマリアニストの混合構成を説明しましたが、そのことが、この教皇が私たちの新たな「生活の規則」を承認した理由なのです。

彼は1920年にアルゼンチンのヌエベ・デ・フリオで生まれ、1998年2月5日にローマで死去しました。1975年に教皇パウロ6世は彼をローマに呼び、奉獻・使徒的生活会省の長官に任命しました。この地位で、Pironio枢機卿は、第二バチカン公会議から生じた教会論に準拠して刷新された多



くの修道会の会則の承認に対して主に責任がありました。教皇ヨハネ・パウロⅡが彼を信徒のための教皇庁評議会議長に任命すると、彼は信徒に対する同じ熱心な奉仕を行いました。

この職務で、Pironio枢機卿は公会議後に生じた新しい信徒運動に関する多くの規則書を承認しました。“彼らは私を希望の預言者と呼びます”と彼は言いました。“そうです、この希望は、キリストの死と復活に基づいているので、私の中で非常に強いです”。

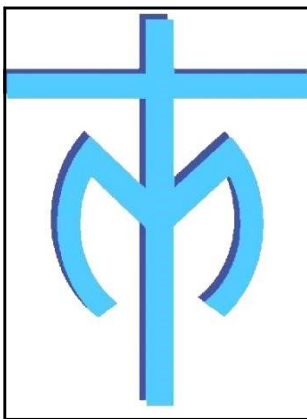
Eduardo Pironio枢機卿は例外的な人間的・靈的資質を持っていました。彼は良き牧者である司教の模範を示しました。彼の司牧的な愛は限界がありませんでした。“私が望む唯一の事は、働くことと奉仕することです”、と彼は言っていました。1996年2月11日、ルルドの聖母マリアの記念日に記された彼の靈的遺言書は大変感動的です。その中で彼は一つのことばを強調しています：“Magnificat”と。彼は、謙虚で思慮深く忠実なおとめマリアに心から身を委ねることで、この遺言書を締めくくっています。

1984年彼は癌と診断されました。この病気の知らせを受け取るや、彼は医者たちに喜んで挨拶を行い、そして神の摂理に身を委ねてこう言います：“彼らが私に知らせた時、何と嬉しかったことか；エルザレムよ、私の足はあなたの門の内に立っています”。Pironio枢機卿は自分の遺体をアルゼンチンの「ルハンの聖母マリア聖地」に埋葬するよう望みました。私たちマリアニストは彼の列福への前進を感謝し、他者への奉仕に生きた彼の生涯の模範に倣うべきです。

---

## わたしたちの地球のための祈り

(教皇フランシスコ ラウダート・シ)



全能の神よ、  
あなたは、宇宙全体の中に、  
そしてあなたの被造物のうちでもっとも小さいものの中におられます。  
あなたは、存在するすべてのものを  
ご自分の優しさで包んでくださいます。  
いのちと美とを守れるよう  
あなたの愛の力をわたしたちに注いでください。  
だれも傷つけることなく、兄弟姉妹として生きるために、  
わたしたちを平和で満たしてください。  
おお、貧しい人々の神よ、  
あなたの目にはかけがえのない  
この地球上で見捨てられ、忘れ去られた人々を救い出すため、  
わたしたちを助けてください。  
世界を貪るのではなく、守るために  
汚染や破壊ではなく、美の種を蒔くために

わたしたちのいのちをいやしてください。  
貧しい人々と地球とを犠牲にし利益だけを求める人々の  
心に触れてください。  
それぞれのものの価値を見いだすこと、  
驚きの心で観想すること、  
あなたの無限の光に向かう旅路にあって  
すべての被造物と深く結ばれていると認めることを、  
わたしたちに教えてください。  
日々ともにいてくださることを、あなたに感謝します。  
正義と愛と平和のために力を尽くすわたしたちを、  
どうか、勇気づけてください。

(「回勅ラウダート・シ ともに暮らす家を大切に」 カトリック中央協議会、2016年より)

## 最近の総本部通信

- 訃報：6-7号
- 2月4日：Horizons 2023 (2回目の情報と登録)－霊生局長、Pablo Rambaud師から3か国語で行政単位責任者と霊生部長に送付。
- 2月24日：教育者国際会議、教育局長、Maximim Magnan士から3か国語でマリア会全修道者に送付。